



初任者指導を通じて 感じること

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



○昔と今で大きく変わった 初任者指導

私が教職に就いたのは昭和四十五年。当時は今のような初任者指導システムがなく、市町村教委や学校が任意で行っていました。ちなみに私が勤務した学校は、三年間初任者指導を受けることになっていました。

四年目に入ったときです。私はいきなり初任者指導担当を命じられました。「たった今、研修を終えたばかりなのに」とびつくりした私。校長先生に聞くと、「いや、いいのだ。新米先生が何に悩んでいるか、何を知らたいと思っているか、そういうことが一番よくわかるのは、ついこの前まで新米先生だった君ではないかな」

なるほど。そういうことか。納得した私は喜んで担当させていただくことにし

ました。当時は法制化以前でしたから初任者指導としての授業研究は少なく、内容は、相談や質問を受けてのフリートークが中心でした。

国による初任者指導がスタートしたのは平成元年度です。私はそのときも、初任者指導教員を命じられました。当時、先輩教員からは、次のような声をよく聞かされたものです。

「今の新米先生はいいわね。恵まれているわ。手とり足とり指導してもらえるのですもの。私たちのころはほったらかし」
「トシ（私）が新米先生のクラスで授業もするのだから。トシのほうがかうまいに決まっている。『受け持ちの先生よりトシ先生のほうがいい』と、子どもが言わないかね。そうしたら新米先生がかわいそうだろう」

それに対する私の答えはこうでした。前者には、「今の時代、保護者対応、児童指導など、昔と全く違います。素直でない子どもが増えていきますし、保護者からの苦情や抗議は増えています。そんなわけで、新米先生は厳しい環境に置かれています。ですから、手とり足とりでちよよいのです」。

後者には、「今は新米先生ならどのクラスにも必ず指導教員が入ります。したがって、子どもも慣れていきますし、保護者もそういうものだと思いますから、何の問題もありません。子どもたち

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

はむしろ『私たちのクラスには先生が二人いる』と喜んでいますよ。どちらの先生も大好きなのです。』

この間、教師を取り巻く周囲の状況は大きく変わりました。研修を担当してきた私はその変化を肌で感じていましたが、先輩教員は、そのことを十分把握しきれていなかったのです。

○柔軟な姿勢と謙虚な気持ちを忘れずに

私が担当した新米先生たちは、押しなべて吸収力があり柔軟でした。一を聞いて十を知る、まわりに気配りができる、子どもと豊かに触れ合えるなど、実にすばらしい資質をもっていました。しかし、それゆえ問題となるケースもありました。

まじめ、情熱的な姿勢、それ自体はすばらしい資質です。しかしそれ一辺倒で心に余裕がもてないと、一部の子どもに對してはうまくいかないこともありま

す。まず、問題行動の多い子どもへの指導です。新米先生の、まじめで情熱的な姿勢は、ちよつとした問題行動でも許せないといった対応に変わります。その結果、叱責やお説教ばかりになったり、子どもに強引に謝らせたりしてしまいます。それが子どもたちの反発を招き、学級が落

ち着かなくなることもあります。

そこで私は、毅然とした姿勢は大事にしながらも、「子どもに反省する気持ちがある」、「問題行動が減った」、「後悔の表情を浮かべている」など、受容すべきところを見つけて声かけするように助言しました。

また、叱責やお説教ばかりになってしまつときは、些細なことには目をつぶることや、そういう子どもでもやさしい行動を見せたり発言意欲に燃えたりするときもあるので、よい点を見つけるように努力することが大切であるという助言もしました。

ある時、初任者が、子どもを自分が思い描いた「あるべき姿」に当てはめようとした結果、それに反発する子どもが出て、学級が落ち着かなくなることがありました。よく「子どもから学ぶ」と言います。このときは、自分の思いを押し付けるのではなく、子どもの一挙手一投足を見てその中に価値を見出すなど、子どものあるがままを受け止めることが大切という助言をしました。

昔なら、こういうことは長い時間をかけて自分自身で体得したものです。しかし近年は、大人社会に心の余裕がなくなり、相手のちよつとしたことを許せず苦情を言ったり、抗議したりするようになりました。また上意下達の管理体制も強まり、失敗は許されない雰囲気になっ

てきています。そのため、ゆっくり自然に会得することは許されなくなりました。

これからは、さらに難しい時代になります。新米先生には、積極性、柔軟性、協調性がますます求められていくでしょう。

「保護者はちつとも私の話を理解してくれませんか」

「子どもってこんなにも言うことを聞かないものでしょうか」

などといった硬直した姿勢では、子どもも浮かばれませんし、新米先生自身も苦しくなってしまうでしょう。

また、冒頭の校長先生の話ではありませんが、システム化された今の初任者指導においても、すぐそばにいる数年以上の教員からの指導にも耳を傾け、手を携えて歩むという姿勢も大切だと思います。

